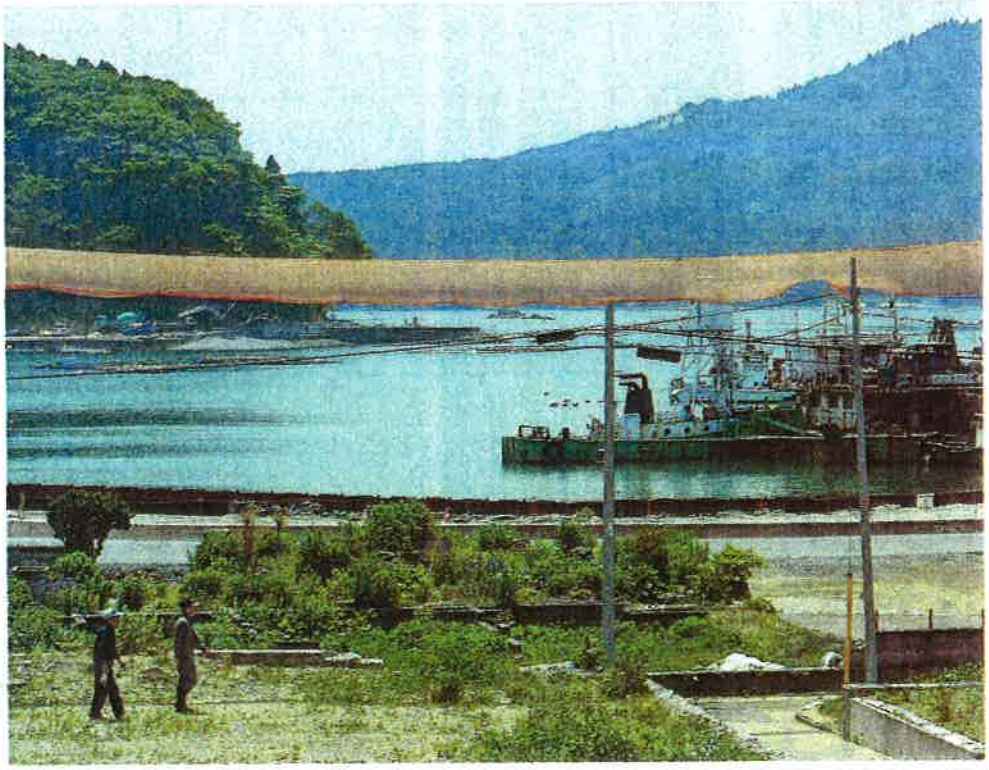
H25.6.22河北①

海隔てる防潮堤に迷い

「必要ても高すぎる」



浜を歩く
津波被災地はいま

唐桑半島鮪立、小鯖（気仙沼）

□海抜約10メートルに

岸壁の復旧工事のけたたましい音が耳を突く。

気仙沼市中心部から車で約30分。唐桑半島の根っこにある鮪立（しびたち）漁港を訪ねた。

被災した住宅跡が続く海岸沿いを歩くと、オレンジ色のネットが宙に張られていた。高さ10メートルはあろうか。

「半分くらいの高さでもいいと思うがなあ…」

自宅が津波にのみ込まれた無職鈴木盛雄さん(74)がネットを見上げ、ため息をついた。

鮪立地区には今、宮城県による海抜9・9メートルの巨大防潮堤計画が持ち上がっている。宙に張ったネットは地元住民が高さを想像しやすいように県に要請し、掛けられた。

同地区は震災で16人が亡くなった。切り立った急斜面が海に迫り、平地が少ない。計画する防潮堤は、断面が台形型で底辺は20～30メートル。約300メートルにわたる分厚いコンクリートの壁が港をぐるりと囲む。

「津波は本当に怖かった。だから、防潮堤は必要だと思った」と盛雄さん。ただ、防潮堤ができれば、見慣れた海はすっぽり隠れてしまう。「高すぎるなあ」という思いは拭えない。

震災前、ワカメなどの養殖を営んでいた鈴木忠勝さん(81)も、高さに疑問を抱いていた。

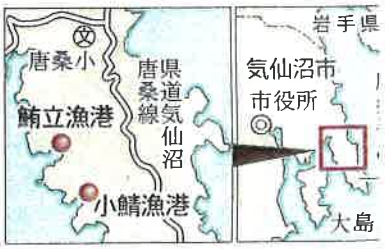
「崖があるから、逃げればいいんだ。海で働く人が多いのに、使いづらい港になる」

□避難道で十分

津波が襲った時、忠勝さんは仲間と集落の奥にある神社に逃げた。「避難できる道路ができれば十分でねえか」。長年、海と生きた忠勝さんが思いの丈を話す。

鮪立漁港から南へ車で約3分。トンネルを抜けると、小鯖（こさば）漁港に着いた。大島が眼前に見える。震災では住民の6人が命を落とした。

ここにも高さ9・9メートルの防潮堤計画がある。高台にある金毘羅（こんぴ



型の防潮堤が二つ建つ。

自治会長を務める鈴木貞治さん(64)の心は揺れていた。

自治会はことし2月、県の計画を一度は受け入れた。防潮堤がないと地域の整備が進まないと聞いたからだ。時間がたち、今は「自然が壊れ、『こんなものを造って』と後世に言われかねない」と反対の思いが強い。

□過疎化を懸念

貞治さんの元には「今更、議論を蒸し返さなくても」という住民の声も届く。それでも「防潮堤に頼らず、逃げる意識を

宮城県が高さ9・9メートルの防潮堤を計画している鮪立漁港。防潮堤と同じ高さにオレンジ色の漁網が張られている。右奥は大島＝6月10日、気仙沼市唐桑町鮪立

「日中 尖閣12カイリ不進入」

首脳会談開催条件 中国要求、政府

日本政府が昨年9月、沖縄県・尖閣諸島を国有化した後、中国政府が首脳会談開催の条件として「日本が領有権問題の存在を認めた上で、日中双方の公船が尖閣諸島から12カイリ（約22キロ）内に入らないことで合意する」ことを日本側に要求していたことが21日、分かった。

（2面に関連記事）

領有権問題は存在するが「棚上げ」状態とする中国の基本方針に沿った要求で、日本側は拒否。電話会談も含め首脳間の協議ができず、1年前に日中防衛当局がホットライン設置などで一致した偶発的衝突防止のための